

かんしょのつる収量に関する事例試験

丸 峯 正 吉・井 手 義 人  
(九州農業試験場)

かんしょのつるを飼料として専用的に利用する場合の事例を得て、つる利用栽培の参考にする目的で九州農試作物第2部ほ場で試験を行った。

試験方法

栽培法として、(1)実生種子播栽培(供試品種：露地開花系統965本/a植)、(2)小さいも直播栽培(九州59号、同66号338個/a植)、(3)挿苗栽培(九州59号、同66号676本/a植)、(4)慣行栽培(農林2号386本/a植)を設け比較栽培した。種子播と直播は4月25日に播種し、挿苗は5月16日に行った。つるの刈取りは7月29日、9月9日、10月28日の3回、慣行区は10月28日の1回行った。追肥は6月3日と刈取り翌日に硫酸を2kg/aをそれぞれ行い、元肥はとくに施さなかった。

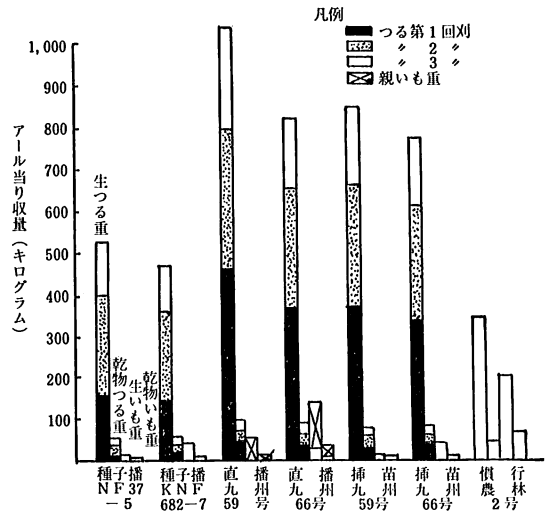
試験結果ならびに考察

実生種子の発芽は播種後約35日を要し、小さいも直播の萌芽は約45日であった。1株または1m当たり総茎長は種子播と直播とは大差があり、直播ははるかにまさる生育量を示した。収量調査成績は第1図に示す。九州59号と同66号における第1回刈りのつる重は350~450/aであり、慣行農林2号の最終つる重と同等以上であった。第2回刈りで約300kg、第3回刈りで約200kgで早刈りほど多収を示し、直播の九州59号の合計つる重は1,000kg/a以上の成績を示した。栽培法を比較すると直播栽培が最も多く、挿苗栽培が僅かに劣り、種子播栽培はかなり劣った。系統比較では九州59号、同66号、露地開花系統の順であった。以上のように7月下旬、9月上旬という時期に多量のつるを収穫できる事例を得たが、一方地下部収量はつるを途中刈りすることによって大きく減収し、結局つる・いも合計乾物生産量は慣行区の農林2号と同等またはそれ以下という成績であった。

器官別特性としては、九州66号は太茎であるため茎重の占める割合が大きい。九州59号は葉身重歩合の占める

割合が高い。全窒素は葉身、葉柄、茎ともに九州59号がまさっている。さらに葉柄、茎よりも葉身の全窒素含量が高いため、蛋白含量の面からみると、葉身重歩合の高い九州59号が有利であるといえる。

以上の試験の結果、種子播栽培は播種作業の機械化が容易で能率的であるという利点があるが、寒冷地では初期生育が劣る点が問題である。挿苗栽培は密植ほど多収をあげられると考えられるが、多くの植付本数を要するため、育苗ならびに植付作業の省力化が課題である。直播栽培は苗床を必要とせず、播種作業も比較的容易であり、九州59号を用いることによって、夏場の生草端境期に多収を期待できる最も有効な栽培法であると考えられる。直播栽培の場合、種いもの確保が困難であるため、九州59号ではつる先苗を利用した採種栽培が必要である。さらにつる多収にして直播性の高い品種の育成が望まれる。



第1図 収量成績